［教育方法一般］

生徒一人一人が学ぶ喜びを感じることのできる指導の工夫

－全職員体制で取り組むユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善－

岩舩　尚貴*

1　はじめに

文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査」結果によれば，LD，ADHD，高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は，約６％の割合で通常の学級に在籍している可能性があることが示されている（文部科学省，2004）。同省からは，「小・中学校においてLD，ADHD，高機能自閉症の児童生徒への教育的支援を行うための総合的な体制を確立することが必要」と提言され，これを受けて「小・中学校におけるLD（学習障害），ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン」がとりまとめられた（文部科学省，2004）。

これら昨今の特別支援教育を取り巻く流れの中で，花隈（2007）は「特別支援教育も個への支援のみでなく，学級経営やクラス全体に役立つ授業づくりが望まれている」と述べ，武藤（2007）は「特別支援教育で得られた知見は，程度の違いこそあれ，通常学級に在籍する『同質』の児童・生徒にも有効なはずであり，その方向性の一つとして注目されている概念が『授業のユニバーサルデザイン化』である」とした。

佐藤（2007）は，「通常学級の授業をユニバーサルデザイン化することで，LD等の子には『なくてはならない支援』，『どの子にもあると便利な支援』が展開できる」としている。武藤，佐藤らが，通常学級における「授業」でのユニバーサルデザイン化を提唱する中で，近年，小中学校における授業のユニバーサルデザイン化についての実践が報告されている。（小学校における学習のユニバーサルデザイン化をめざしたセルフマネジメントツールを用いた授業改善とその効果を検証した報告（小林・古田島・長澤，2009）や，中学校の通常学級における授業のユニバーサルデザイン化の有効性について検証した報告（小林，2010）などがそれである。）

小林は，その実践の中で，小中学校においてセルフマネジメントツールの活用を通した有効性を実証している。たしかに，セルフマネジメントツールは授業のユニバーサルデザイン化を進める上で「実態把握」の有効な手立てと言えよう。しかし，管見の限りでは，中学校現場における方法論としての「授業のユニバーサルデザイン化」は，未だに先行研究が報告されていない。

そこで本研究では，教科担任制である中学校において，教科を横断して取り組める「授業のユニバーサルデザイン化」に主眼をおき，生徒一人一人に「分かる喜び」や「学ぶ楽しさ」を味わわせるための方法として，自校で作成した「ユニバーサルデザインレベル表」の有効性を検証していきたい。

2　研究の概要

(1)　自校の実態

柏崎市の山間部に位置する柏崎市立高柳中学校の全校生徒数は，平成23年度27名（男子15名，女子12名），平成24年度26名（男子16名，女子10名）であり，極小規模校である。学級数は平成23年度，24年度ともに，通常学級３クラス，特別支援学級１クラスである。通常学級に通う生徒の中にも，発達障害の診断を受けている生徒，または発達障害の傾向が見られる生徒が在籍している。本研究を行った平成23年度の学力実態および，通常学級に在籍する特別な支援を要する生徒の実態は右の表の通りである。

（表１）平成23年度学力実態と通常学級に在籍する特別な支援を要する生徒の割合

	NRT結果	特別な支援を要する生徒の割合
１年生	47.6(男子49.5 女子39.0)	２０％
２年生	52.7(男子53.0 女子52.4)	０％
３年生	55.1(男子58.6 女子50.8)	１８％

※特別支援学級の数値は含まず

＊ 柏崎市立高柳中学校

⑵ 課題

（表１）から伺える通り，平成23年度における高柳中学校の通常学級在籍生徒中，特別な支援を要する生徒の割合は11.5％であった（学級別に見ると１年生20％，３年生18％）。この数値は冒頭で述べた「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査」の約６％という割合を大きく上回る数値である。また，４月に行ったNRTを見ると，特別な支援を要する女子生徒が在籍する学級では，男子と女子の偏差値に大きな違いが見られる。このことから，発達障害のある生徒には「なくてはならない支援」，「どの子にもあると便利な支援」が日々の授業の中で必要不可欠であるという実態があった。

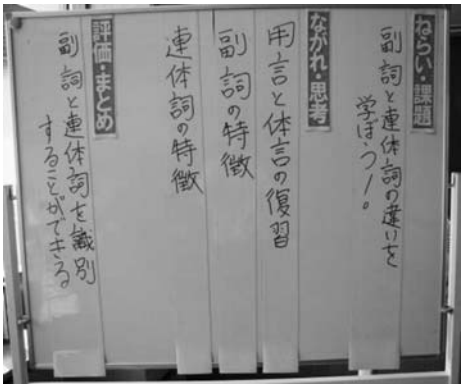
⑶ 方法

上記の課題を受けて，平成23年度入学生を迎える前年度を準備段階として，教科を横断して授業者が取り組むことのできる「ユニバーサルデザインレベル表」（表２）を自校で作成した。これは，広島県大竹市立大竹中学校の「５つの教育実践とレベル表」(2010)をもとに，研究主任（筆者）を中心として研究推進部で練り上げて作ったものである。平成23年度より，職員研修テーマを「生徒一人一人が学ぶ喜びを感じることのできる指導の工夫」と定め，全職員体制で「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」を行った。

① 全職員体制で取り組む「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」

日々の授業の中で「実践項目とレベル」を意識するとともに，学習指導案には重点的に取り組む「実践項目とレベル」を明記し，参観者はレベル表に基づいて授業評価を行った。また，実践項目１「授業のねらいと流れを提示する」の環境構築として特別教室を含む全教室にホワイトボードを設置し，授業者が「ねらい・課題」「流れ・思考」「評価・まとめ」を授業前にあらかじめ記入できるようにマグネットシートを全職員に配布して授業を行った（図１）。

11月期を「わかる授業強調月間」として，職員一人一人がレベル表における到達レベルを一段階高く設定して，授業実践後に自己評価をしていく期間を設けた。



（図１）ホワイトボードとマグネットシートの使用例

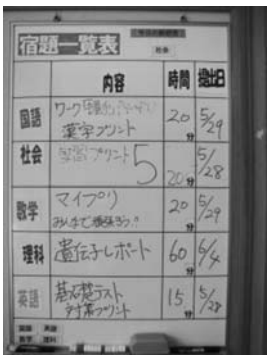
（表２）自校作成のユニバーサルデザインレベル表

項目番号	共通実践項目	レベル１	レベル２	レベル３
1	授業のねらいと流れを提示する。	授業のねらいと流れを授業の初めに提示黒板に提示する。今やっていることが何かわかるようにする。	授業のねらいと流れと評価を授業前に書いておき，提示黒板に提示する。授業の終わりには必ず目標達成の確認を行う。	各単元に入る前に，その単元のねらいと最終目標を提示する。単元の終わりには必ず目標達成の確認を行う。
2	一文一動詞の指示を行う。	生徒に分かりやすく伝えるため，本時の課題や作業の指示・説明を一文一動詞で行う。	課題や作業の指示・説明などは，生徒に分かりやすい表現(言葉や教具の工夫)で，短く簡潔に行う。	課題や作業の指示・説明などは，やるべき作業の進捗状況や生徒の理解を確認してから次の指示を出す。
3	聞く・話す・書くなどの作業は一つずつ行わせる。	学習意欲を高めるため，学習用具の整理整頓を徹底させる。	聞く・話す・書く時間を確保する授業計画を立てる。	説明するときは，必ず注目させてから行う。
4	見やすくわかりやすい板書を工夫する。	板書計画ができ，板書のイメージがある。	生徒がノートに写しやすい板書の量とレイアウトである。	学習内容としてのポイント，まとめがあり振り返りやすい板書である。必要に応じて補助プリントを活用する。
5	個に応じた課題を提示し，個に応じた支援策を行う。	板書のまとめ等，早く活動が終わった生徒には次の課題を用意し，あらかじめ明示する。	授業の中で個別指導（個別学習）の時間を設定し，個に応じた課題（基礎・補充・発展など）の実施や個に応じた支援を行う。	授業の中での個に応じた課題の提示と個に応じた支援を行うことに加え，宿題＝家庭学習でも個に応じた課題(基礎・補充・発展など)の提示や個に応じた支援を行う。
6	授業で生徒のよいところをほめる。	一人一人が活躍できる場面を設定する。	生徒の発言のよいところを見つけ，肯定する。	一人１回は，ほめる。

② 教科の特性に応じたユニバーサルデザイン化

教科の特性に応じて各教科主任によるユニバーサルデザイン化を行った（図２）。また，教科のユニバーサルデザイン化とともに，見通しをもつことが苦手な生徒に配慮して教室環境のユニバーサルデザイン化を進めた（図３）。教科を横断した方法論である「ユニバーサルデザインレベル表」が「ソフト」であるのに対して，「教科の特性に応じたユニバーサルデザイン化」を「ハード」としてユニバーサルデザイン環境を構築していくことによって，より生徒に「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を感じさせることをねらった。

（図２）教科の特性に応じたユニバーサルデザイン化の一例（理科：理科室のユニバーサルデザイン化）



（図３）各教室に設置された教科一覧の宿題黒板

以上のユニバーサルデザイン環境を平成22年度の準備段階で整え，佐藤が述べた発達障害のある生徒には「なくてはならない支援」，「どの子にもあると便利な支援」を基本理念として，「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」を全職員体制で行った。本研究は「自校で作成した『ユニバーサルデザインレベル表』が，生徒一人一人に『分かる喜び』『学ぶ楽しさ』を味わわせるために，有効な方法である」という仮説のもと，平成23年度４月から３月までの12か月間の実践の中で得たデータに基づいて検証していく。

3 結果

(1) 生徒の変容

① 授業評価アンケートから

「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」の有効性を検証するために，７月期と12月期にレベル表に基づいた「授業と学習アンケート」を行った。図４は，実際に生徒が書いた「授業と学習アンケート」である。質問項目①から⑥までが，「ユニバーサルデザインレベル表」の実践項目番号１から６に対応しており，質問項目⑦，⑧が「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」について尋ねる質問項目となっている。

１ 授業と学習アンケート ［全教科共通］ ２年 男・女

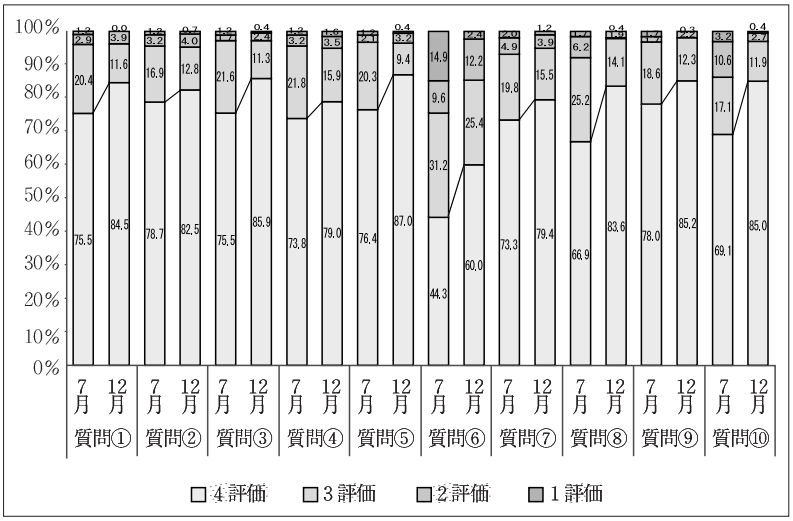
次の項目について各教科ごとに、下の４段階にしたがい、自分が一番あてはまる数字を空欄に記入してください。
4：そう思う **3**：少しそう思う **2**：少し思わない **1**：そう思わない

授業の内容について	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	保体	技術	家庭
① ホワイトボードに提示される授業の「ねらい」「流れ」「評価・まとめ」の言葉が分かりやすく、授業でやるべきことよくわかる。	3	3	4	4	3	4	4	4	4	4
② 先生の説明や指示は分かりやすい。（分かりにくい言葉が使われたり、作業中に次の指示が出たりしない。）	3	3	4	4	3	3	3	4	4	3
③ 先生は「聞く」、「話す」、「書く」、「読む」などの時間を分けて指示をしてくれるため、授業に集中することができる。（授業は「聞く」時間と「実践」する時間を分けて指示してくれるため、授業に集中することができる。）	3	3	4	4	2	3	3	3	3	3
④ 先生の書く黒板の内容はノートやワークシートに写しやすく、ポイントやまとめがあって分かりやすい。（体育は後期の「保健」で実施）	3	2	4	4	3	3	3	／	3	3
⑤ 授業の課題や作品作り、宿題などで分からないところや、できないところがあれば熱心に教えてくれる。	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3
⑥ 授業で自分が活躍していると感じることがある。（発言をする場面や先生にほめられる場面がある）	4	4	4	4	2	3	3	4	3	3
⑦ 自分にとって授業の内容はよく分かる。	3	3	4	4	2	3	3	4	4	3
⑧ 授業を受けて「楽しい」と感じることができる。	3	3	4	4	2	3	4	4	4	4
⑨ 配布される資料（体育は実技の図解）の説明・指示は分かりやすい。	3	4	4	3	3	3	3	3	3	3
⑩ 授業中で課題について考えたり、作業をしたり、活動（保体）したり、作品（美術、技術、家庭など）を作る時間はちょうどよい。	3	3	4	4	3	3	3	3	3	3
自分の学習について	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	保体	技術	家庭
① 先生や友だちの話や、アドバイスをしっかり聞いている。	3	3	4	4	2	3	3	3	3	3
② 分からないことは質問し、発表・発言をはっきりと行っている。	4	4	4	4	3	3	3	4	4	3
③ 授業中、ノートやワーク、ワークシートの記入をきちんと行っている。（体育は意欲をもって実技を行っている。）	4	4	4	4	3	3	3	4	4	3
④ 課題や宿題は〆切を守り、提出している。	4	3	3	4	3	／	／	／	／	／

（図４）ユニバーサルデザインレベル表に基づいて作成された「授業と学習アンケート」

右のグラフ１は，図４のアンケートを７月期と12月期ごとに集計したものである（職員研修では教科ごとに集計）。「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」を始めて３か月目の７月期よりも，12月期では，すべての質問項目で「４評価」の数値が増加している。

特に注目すべき変化として，ユニバーサルデザインレベル表の実践項目とリンクしている①から⑥の質問項目の数値が増加することに伴って，⑦「自分にとって授業の内容はよく分かる」の「４評価」が5.9ポイント増加し，⑧「授業を受けて『楽しい』と感じることができる」に関しては16.7ポイントの増加が見られた。

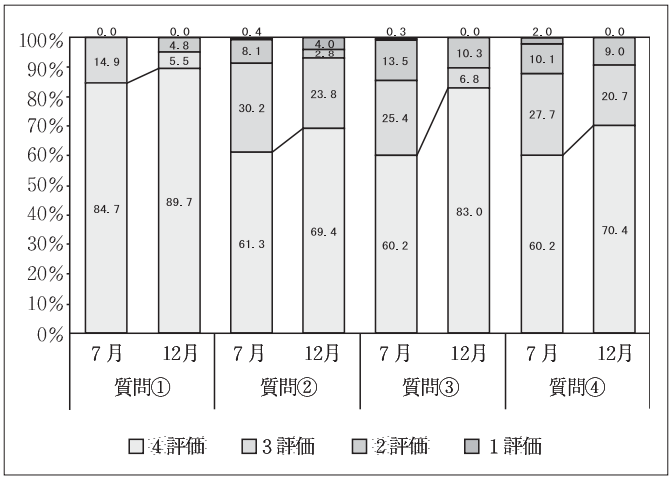


（グラフ１）授業評価にみられる７月期と12月期の変化

② 学習の様子（生徒自身の取組評価から）

グラフ２は，図４の「授業評価と学習アンケート」の下段「自分の学習について」項目の集計結果である。③「授業中，ノートやワーク，ワークシートの記入をきちんと行っている」の「４評価」が７月期から12月期にかけて22.8ポイント増加した。また，④「課題や宿題は〆切を守り，提出している」では，「１評価」をつけた生徒が０％となり，「４評価」の生徒が増加した。

発達障害のある生徒には「なくてはならない支援」，「どの子にもあると便利な支援」というコンセプトのもと，授業改善を行った結果，授業についていけない生徒が目に見えて減ったと言える。また，それに伴って，課題の提出率が７月期と12月期では変化がみられた。



（グラフ２）「生徒自身の取組評価」にみられる７月期と12月期の変化

⑵ 抽出学年の変容

表１で示したように，平成23年度入学生の１年生は，３学年中，特別な支援を要する生徒の割合が最も高く，男女の学力差が大きい学年であった。この学年は入学時より「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」の取組の中で学習活動をしてきた集団である。平成23年度４月に行ったNRTの結果と平成24年度４月に行ったNRTの結果を比較すると，偏差値平均47.6（男子49.5 女子39.0）から，偏差値平均53.7（男子53.0 女子47.0）と，男女ともに大幅に数値が上がった。

４ 本研究の考察

⑴ 「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」の有効性について

「授業評価」，「生徒自身の取組評価」といった２つのデータの数値の向上や，平成23年度入学生の学力向上といった点からも「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」は，生徒一人一人に「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を味わわせるために有効な手段であったと考えることができる。毎時間授業者が変わる教科担任制という中学校現場において，「授業のユニバーサルデザイン化」は小学校での実践よりも効果をあげるのは難しいと言える。しかし，全職員共通の「ユニバーサルデザインレベル表」がマニュアルとしてあることによって，職員の授業改善の方法がより明確となり，生徒にとっても「どの先生も同じように授業を進めてくれる」といった点で安心して学習に取り組める要因になったと推察される。

また，「ユニバーサルデザインレベル表」は，授業での方法論としてのみではなく，全職員体制で「個別の学習支援計画」を進めていく際にも有効な手立てとなった。

（表３）生徒Ａの個別の学習支援計画の例

	教科	学習の様子	支援策	支援の実際
生徒Ａ	国語	・集中力が続かない。教科書や黒板に目が向かないことがしばしばあり，注意を促すが，長くは続かない。 ・話し合い活動において，自分の意見を話すことができるが，聞く活動が苦手である。	・レベル表の実践項目３を徹底して行い，話す，聞く，読む，書くの活動を明確にする。 ・音声言語活動のルールを伝え，教室全体でそのルールを守って話合い活動を行うシステムを作る。 ・気持ちに大変ムラがある生徒のため，気分が悪くなると学習意欲が著しく低下する。レベル表の実践項目６を意識しながら授業を行う。	・一つ一つの作業速度が他の生徒と比べて遅いので実践項目３を意識して授業を行っている。（指示が伝わらなかったり，「わからない」「できない」「ついていけない」と思うと，学習意欲が低下する。） ・「授業で活躍したい」という思いをもっている。実践項目６で活躍する場面を設定したり，ほめる指導をすることで有効に意欲を喚起することができている。

上の表３は生徒Ａの「個別の学習支援計画」である（国語のみ抜粋）。高柳中学校では年度当初に通常学級において学習支援が必要であると考えられる生徒について、それぞれの教科で「個別の学習支援計画」を作成し、職員研修において「支援の実際」の進捗状況を研修する。この時に、その生徒にとって有効であった実践が「ユニバーサルデザインレベル表」を基にして話し合われ、全職員で共有される。教科担任制であっても、「ユニバーサルデザインレベル表」という共通の実践項目があることによって、全職員体制でより効果的なアプローチが可能となった。

（表４）「ユニバーサルデザインレベル表」に基づいた職員アンケート

・以前に比べ，生徒に達成させたい姿を絞って授業を行うことができた。
・実践項目１とリンクして，マグネットシートに流れを書き，ホワイトボードに貼りだして見通しを持たせた。学習活動を進めながら黒板に貼りだしていったので，それが発問になったと思う。
・「生徒にとってわかりやすく」を意識して指示を出すことを心がけた。「一動詞」までは意識できていなかった。今後は「ねらいを達成するための発問づくり」をしていく。
・実践項目６を常に意識し，生徒の発言が出たときには必ず肯定した（教科の特性もあるため）。積極的に発言することを賞賛し，通知票などの所見でも発言した生徒を評価した。日頃からの雰囲気作り，生徒も教師も賞賛し合う雰囲気が大切であると感じた。
・全員一回をほめる機会がつくれていなかった。誰をどの場面で活躍させるのか，具体的なイメージをもって授業を行う必要がある。
・生徒一人一人が授業の中で「学ぶ喜び」を感じている姿をイメージをしながら授業改善を行う姿勢を継続していきたい。

⑵　教師の変容

「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業実践」が生徒一人一人に「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を味わわせるために一定の効果を上げたのも，「授業のユニバーサルデザイン化」に対する教師一人一人の意識変容があったからこそである。下の表４は，年度末に行った「ユニバーサルデザインレベル表」に基づいた職員アンケートの回答である（一部抜粋）。

研究対象期間では，「個別の学習支援計画の作成」「授業評価の分析と改善策」「分かる授業強調月間」等，「授業のユニバーサルデザイン化」という視点で，職員研修を計画し実行していった。教科担任制である中学校現場において，全職員が一丸となって，日々，授業改善を進めていけたのは，共通実践項目としての「ユニバーサルデザインレベル表」があったからと言える。

（表５）職員研修資料「授業評価の分析と改善策」（数学のみ抜粋）

	授業評価の分析	９月からの改善策
	【「ユニバーサルデザイン」に係わる項目（①～⑥）について】 実践項目１「授業のねらいと流れを提示する」 →全学年で肯定的評価となった。（６項目中最も高い評価） 実践項目２「一文一動詞で指示を行う」 →肯定的評価96％で，２年生の１名で「2」評価が見られた。 実践項目３「聞く・話す・書くなどの作業は一つずつ行わせる」 →肯定的評価96％で，２年生の１名で「2」評価が見られた。 実践項目４「見やすくわかりやすい板書を工夫する」 →全学年で肯定的評価となった。 実践項目５「個に応じた課題を提示し，個に応じた支援策を行う」 →全学年で肯定的評価となった。	【「ユニバーサルデザイン」に係わる項目（①～⑥）について】 実践項目１「授業のねらいと流れを提示する」 →今後はより徹底して行い，生徒に授業の見通しがもてるよう工夫する。授業者は一授業ごとに見通しをもって事前準備を行う。 実践項目２「一文一動詞で指示を行う」 →ビデオやＩＣレコーダーを用いて自分の授業を振り返る機会を意識的に設ける。 実践項目３「聞く・話す・書くなどの作業は一つずつ行わせる」 →実践項目２同様にビデオ等を用いて授業改善を意識的に行うよう心がける。

数学	実践項目６「授業で生徒のよいところをほめる」 →肯定的評価84％で，否定的評価の内訳は，１年生「2」評価１名，２年生「1」評価１名，３年生「2」評価１名であった。（６項目中最も低い評価） 【その他の分析】 ・「よく分かる」と答えた生徒と，「楽しい」と答えた生徒の割合が各学年ほぼ同じである。相関関係にあると考えられる。 ・課題について考えたり作業する時間が「短い」と考えている生徒がいるようである。 【自由記述から】 ・否定的記述として，１年生から「ノートをまとめるのが難しい」という指摘が見られた。	実践項目４「見やすくわかりやすい板書を工夫する」 →マグネットシートを用いたことが効果的だったように思う。「授業改善のポイント：課題とまとめのある板書」をおさえて授業を行う。 実践項目５「個に応じた課題を提示し，個に応じた支援策を行う」 →今年度は基礎テスト課題や学習強調週間課題，夏休み課題で個に応じた選択制の課題を提示した。ここまでの取組を踏まえて夏休み以降も「その生徒にとって最善の課題，最善の支援」を行っていくよう心がける。 実践項目６「授業で生徒のよいところをほめる」 →一問一答形式の授業を避け，授業構想の段階で，一人一人が活躍できる場面を考えながら授業を行う。また，「授業改善のポイント：思考を広げ，深める発問」を意識して授業を行い，全員が参加し，全員が「学ぶ喜び」を感じる授業を目指す。 【その他，自由記述からの改善策】 ・ノートの書き方のルールを今一度確認し，実践項目４を意識して授業に取り組む。 ・「楽しく分かる授業」を目指して，今回の授業評価を真摯に受け止め，授業改善の姿勢を絶やさずに日々研修を積んでいく。

5　今後の課題

本論で述べてきた「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」は，生徒一人一人に「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を味わわせるための実践として，平成24年度現在も全職員体制で取り組んでいる。今後の課題として挙げられる３点について述べたい。

１点目は，自校で作成した「ユニバーサルデザインレベル表」の項目内容や，レベル設定の妥当性である。実践項目によっては，レベルの段階を上げやすいものもあれば，そうでない項目もある。また，５教科と実技を伴う教科など，特性が違う教科同士が横断的に使える項目と，そうでない項目があるのも自校のレベル表の脆弱な部分と言える。今後は，日々の実践を重ねる中で，中学生の発達段階や学習内容を考慮した，どの教科でも使いやすい項目に修正・深化させていく必要があるであろう。

２点目は，「授業と学習アンケート」の質問項目⑥「授業で自分が活躍していると感じることがある」での肯定的評価が，他の質問項目に比べて著しく低い数値であるという点である。この質問項目は，９教科すべてにおいて低い数値であり，職員研修において改善策を出し合ってきた項目である。７月期から12月期にかけて数値は上がるが，年度が変わり，新入生が入学してくると前年度同様に数値が落ち込む。生徒が活躍する場面を意識的に作り，褒める機会を増やすことで自己肯定感を高める指導を継続的に行うとともに，「授業のユニバーサルデザイン化」という観点で，小学校との連携も必要不可欠であると考える。中学校区内の小学校は１校であるという自校の特徴を生かして，「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業改善」を中学校区共通の実践としていくことが理想であると考える。

３点目は，「ユニバーサルデザインレベル表に基づいた授業」が，「手段」でなく，「目的」に陥りやすいという点である。あくまでも「ユニバーサルデザインレベル表」の実践項目は，生徒に「分かる喜び」や「学ぶ楽しさ」を味わわせるための「手段」である。「ユニバーサルデザインレベル表」に基づいて授業をすることが「目的」になるのではなく，その先にある「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を味わわせることが最大の「目的」であるということを常日頃意識して，今後も全職員体制で実践していきたい。

〈引用・参考文献〉

○文部科学省（2004）「小・中学校におけるLD（学習障害），ADHD（注意欠陥／多動性障害），高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」
○武藤崇（2007）「特別支援教育から普通教育へ：行動分析学による寄与の拡大を目指して」，行動分析学研究
○佐藤慎二（2007）「特集『あると便利』ユニバーサルデザイン」，特別支援教育研究
○花隈暁（2008）「まとめと提言　ユニバーサルデザインの学級経営と授業を目指して」，特別支援教育研究
○小林浩子　古田島恵津子　長澤正樹（2009）「通常学級における学習のユニバーサルデザイン化の有効性－教師の指導行動の変容による学級集団と特別なニーズのある児童の問題行動の改善について－」，新潟大学特別支援教育専修年報
○小林浩子（2010）「特別支援教育 中学校の通常学級における授業のユニバーサルデザイン化の有効性について－セルフマネジメントツールの活用を通して－」，上越教育大学教育実践研究
○広島県大竹市立大竹中学校（2010）「『おおたけ授業スタイル』をワークショップ型研修で確立」，Benesse教育研究開発センター『VIEW21』